

最後の命綱の電話相談

早季子さん（仮名）はすでに30代後半になっていました。妊娠が分かった時、それは結婚できない相手との間にできた子供だった。周囲は両親も友人もどうして産もうとするの、中絶しなさいと。しかし彼女には中絶という選択肢はなく、生むと心に決めて、産んでマイナスになることは何もないと思って、すぐに区役所や福祉事務所に電話。しかし、どんな支援も受けられないことが分かった。悶々とした日々が続く中、赤ちゃんはもう9か月、相談だけでも、と思って円ブリオ基金センターに連絡してきたのです。仕事はやめざるを得ず経済的に支えがなく、帝王切開になるし、せっかく生む決意をしてもどうにもならなくなってしまったのでした。最後の最後のまさに命綱でした。早季子さんからの言葉です。「出産直前での問い合わせにもかかわらず迅速にご対応いただき有難うございました。おかげで無事手術代を支払うことができました。そして何よりも一番励みになったのは未婚の状態でお産を決意したことを応援して下さるお言葉でした。これからも自分の決意を忘れず息子を育て自分も育てられて幸せに過ごしたいと思います。反対していたご両親も赤ちゃんを見に来てくれました。」

